

每月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵稅共五十錢)



二圭田須 兼編輯  
市田上縣野長 兼發行  
校學門專絲蠶田上 所行發  
會町縣南市野長 所刊印  
社會式株聞新日每機信

### 第廿回卒業式

上田蠶絲專門學校第廿回卒業式は去る三月十五日午前十時半より講堂に於て舉行された。先づ來賓、職員學生着席、直ちに卒業證書、修業證書授與、針塚校長の式辭あり、續いて鳩山文部大臣(井上教授代讀)石垣長野縣知事(高橋蠶絲課長代讀)成澤上田市長、春日中校長(中等學校代表)瀧澤一郎氏(實業家代表)竹市北信毎日社長(新聞記者代表)神戸生絲檢査所伊藤技師(同窓會代表)等の祝辭あり。尚ほ續いて在校生總代鈴木一郎氏の送辭、祝電披露、卒業生並に修業生總代川村五郎氏の答辭ありて〇時半閉式となれり。

式後雨天体操場に於て來賓、職員卒業生一同に茶菓の饗應ありたり。

### 式辭

本日茲ニ當校第二十回卒業證書授與式ヲ舉行スルニ當リ貴賓各位ノ貴臨ヲ辱ウシ文部大臣閣下ヨリハ特ニ懇篤ナル祝詞ヲ寄セラレ定ニ本校ノ光榮ニシテ深ク欣喜トスルトコロナリ。

諸子ト分ルルニ際シ所懷ヲ陳ベテ錢セントス。

古人曰ク衰頹の景象ハ盛滿ノ中ニ在リ發生の機軸ハ零落ノ内ニアリ故ニ君子ハ安キニ居テ宜シク一心ヲ操リテ以テ患ヲ慮ルベシ變ニ處シテハ當ニ百忍ヲ堅ウシテ以テ成ルヲ圖ルベシト盛衰窮通ハ世ノ常ナリ。現在我國ハ種々ノ艱ヲ有スルモ之ヲ忍テ我等ニ與ヘタル試金石ナレバ百忍以テ之ヲ突破セザルベカラズ。乃チ其處ニ今後我國ノ偉大ナル發達ヲ見ルベキヲ信ズ。余ノ諸子ニ深ク囑スルトコロノモノハ之ガ先鋒トナルコトニアリ諸子夫レ奮勵一將セラレヨ。

左レバ諸子ノ責任ハ重大ナリ、前途ハ遼遠ナリ。而シテ眞ノ技術ト人格ノ陶冶トハ今後實社會ニ立チツ、不斷ノ努力ヲナスコトニヨリテ初メテ得ラルルモノナリ益々精進努力シテ堅キ決心ト強キ信念トヲ確立スベキナリ否ラザレバ現在ノ如キ國際間ニモ個人人間ニモ競争ノ激甚ナル秋ニ當リテハ忽チ敗滅者トナルヲ免レザルハ火ヲ見ルヨリ炳カナリ。今ヤ國家ハ非常時ナリ東洋平和確立ノ爲メ我國建國精神ノ徹底ノ爲メ殆ンド國力ヲ傾注シテ全世界ヲ敵手

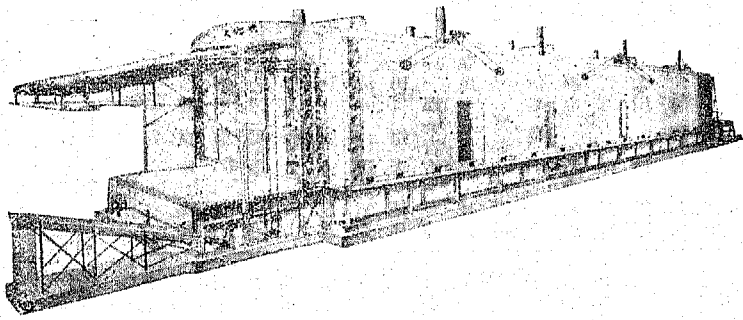
山本三六郎著  
化學純絹の工業的完成  
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其の改正  
蠶絲業法規要論  
市田上縣野長 所行發  
會究研學科絲蠶 所刊印  
(振替長野6413番)

蠶絲業法規要論  
市田上縣野長 所行發  
會究研學科絲蠶 所刊印  
(振替長野6413番)

トシテ奮闘シツ、アルコトハ諸子ノ熟知スルトコロナリ。諸子ハ又非常ノ決心ヲ以テ進ンデ此ノ時艱ヲ救フノ大覺悟ナカルベカラズ。若シ夫レ此ノ時局ヲ度外視シ嫉妬懷忌シ濫リニ只安キニ從ハントシ人後ニ隱レテ目前ヲ糊塗セントスルガ如キアラバ實ニ國民ノ恥辱ニシテ社會ノ茶毒者ト謂ハザルベカラズ。世間或ハ蠶絲業ノ前途ヲ疑フモノアランモ世ニ絹絲ニ勝レル纖維ナク而シテ又其ノ生産額ハ世界ノ全纖維生産額ニ對シテ僅カニ百分ノ一ニ足ラズ而シテ今後絹絲ノ新用途ハ圖リ知ルベカラザルモノアリ一朝ノ經濟不況ニ基因セル絲價ノ低落ニヨリ甚シク前途ヲ悲觀スルノ要ナシト信ズ。益々良絲ヲ廉價ニ生産スルノ方法ヲ研究シ斯業ノ伸張ヲ期スベシ之レ實ニ諸氏ニ與ヘラレタル任務ナラズヤ。

之ヲ世界的ニ大觀シテ日本ノ今後ノ大工業ハ纖維工業ニアリト信ズ。學問ハ共通ナリ諸子ノ活動ノ天地ハ汎ク纖維工業界ニアリ前途多望ナリト謂フベシ。宜シク自重自愛シテ斯業ノ先覺者トシテ將タ亦指導者トシテ其ノ本分ヲ盡シ以テ國家ガ諸子ヲ養成シタル趣旨ニ背カザランコトヲ期スベシ。夫ノ誤レル個人主義ヲ排斥人格的生活ヲ遂ゲ正道ニ立脚シテ

### 現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



【銀像贈呈】

- 營業課目
- 特許大和式自動輸送乾繭機
  - 特許帶川三光式乾燥裝置
  - 特許願やまやホイロ機
  - 特許大和式熱湯自動還元機
  - 特許水野式改良ロストル
  - 特許アイエム・コースター
  - 特許アイエム・ストーカー

製作發賣元

株式會社

大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地  
電話京橋(56)五三二〇番

### 祝辭

本日茲ニ本校第二十回卒業證書授與式ヲ舉行セラレ、ニ當リ一言所懷ヲ述ベテ祝辭ニ代ヘントス。

諸子深ク思ヒラ此ニ致シテ區々タル眼前ノ利害ニ心ヲ動カスコトナク

上田蠶絲專門學校校長 針塚長太郎

昭和八年三月十五日

不拔ノ信念ト不撓ノ意氣トヲ以テ常ニ修養積ミ研鑽ヲ重ネ以テ益々帝國ノ富源ヲ開發セラレシコトヲ望ム。  
昭和八年三月十五日

文部大臣 鳩山一郎

祝 辭

本日土田蠶絲專門學校卒業證書授與式ヲ舉行セラル、ニ當リ一言所懷ヲ述ヘテ卒業生諸君ノ前途ヲ祝セントス。

諸君多年研鑽ノ功成リ茲ニ本日ヲ以テ卒業ノ榮譽ヲ擔ハルニ慶賀ニ堪ヘザルナリ。惟フニ我國現時ノ情勢内、思想問題、經濟問題ノ難局ニ直面シテ、國際場裡ニ於テハ孤立ノ苦境ニ立チ國民ノ奮起努力ヲ俟ツ今日ヨリ急ナルハナシ。而シテ國民經濟ノ根柢ヲ培ヒ國家産業ノ興隆ヲ計ルハ實ニ此ノ世局ニ處スル要道ナリ。殊ニ蠶絲業ハ我國産業ノ樞軸ニシテ其ノ經營如何ハ以テ國家ノ消長ニ關ス。諸君今日此重任ヲ負ヒ各其志ス所ニ向ツテ邁進セラレントス。我國蠶絲界ハ此ニ新進有爲ナル人材ヲ迎ヘ益々其技術ノ改良ヲ促シ愈々其經營ニ堅實ヲ加ヘ以テ産業ヲ興隆スヘキハ予ノ信シテ疑ハサル所ナリ。希クハ諸君自重自愛以テ國家ノタメニ努力奮闘セラレシコトヲ。

昭和八年三月十五日

長野縣知事 石垣倉治

祝 辭

我が土田蠶絲專門學校ハ本日ノ佳晨ヲトシ茲ニ卒業第二十回卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラル。我等同窓生ノ誠ニ欣喜ニタヘサル處ナリ。今ヤ吾蠶絲界ノ愈多事ナルニ際シ新

進有爲ノ士來ツテ新方面ノ開拓ヲ翹望スルヤ切ナルモノアリ。茲ニ於テ諸君ノ實務ハ極メテ重且大ナルモノアルト共ニ其ノ前途ヤ又益多望ナリト云フ可シ。然リト雖モ諸君ノ行程ハ遼遠ニシテ際涯ナク崎嶇、峻峭其間幾多ノ障礙ヲ免レシト雖モ努力奮闘克ク萬難ヲ排シテ事ニ當ラムカ其成功期シテ待ツ可キノミ。今ヤ諸君ハ校門ヲ出テントスルニ當リ須ラク堅實穩健氣骨稜々浮華ヲ去リ虛榮ヲ斥ケ以テ大器ノ晩成ヲ期セラレントス。聊カ以テ祝辭トナス。

昭和八年三月十五日

土田蠶絲專門學校千曲會總代

伊藤勢龜

送 辭

梅香馥郁トシテ衣袂ヲ襲ヒ柳煙輕ク堤ヲ拂フノ時茲ニ本校第二十回卒業證書授與ノ盛典ヲ舉ゲラレ文部大臣閣下ヲ初メトシ朝野貴顯ノ光臨ヲ辱フシ校長閣下ノ御訓辭ニ接ス兄等カ光榮何物カ之ニ加ヘン哉。夫百花ニ魁スルノ梅花ハ幾多ノ霜雪ヲ冒シテ芳芬獨リ擅ニス兄等今日ノ榮譽モ亦偶然ナラム哉。回顧スレハ生等本校ニ入り兄等ト窓ヲ同フシテ茲ニ一年或ハ二年ノ間愚鈍ノ身尙今日アルヲ得ルハ之校長閣下並ニ諸先生ノ學德ニ因ル事勿論ナルモ兄等ノ提携誘掖ノ勞多クアルヲ痛感ス。之生等ノ感謝措ク與ハサル所ナリ。兄等入學シテ茲ニ三星霜雪ノ効空シカラス生等ヲ殘シテ學窓ヲ去ラムトス豈ニ惜別ノ情ニ堪ヘン哉。熟々現代社會ノ大勢ヲ惟フニ嚴メトシテ文明ノ域ニ進ムト雖モ國際間ノ競争益々激烈ヲ加ヘ列強互ニ虎視眈々トシテ虛

ヲ睨フ。又吾々ノ從事セントスル蠶絲業及紡績業ハ國民經濟ノ基本ニシテ輸出貿易ノ大宗ヲリト雖モ今ヤ世界經濟不況ニ直面シ其ノ前途タルヤ尙樂觀ヲ許サス。斯クノ如キ時ニ際シ兄等ハ將ニ進ミテ邦家ノ中堅タリ且社會ノ指導者トラントス豈ニ慶セサルヘケン哉。然リト雖モ兄等ノ前途ハ遼遠ニシテ世路平坦ナラス。而シテ尙實務ノ重且大ナルヲ思フ時生等一同兄等カ自重努力セラレ以テ今日ノ榮譽ヲ辱メス本校訓育ノ本旨ニ沿ヒ其ノ恩義ニ報セラレント事ヲ希望シテ止マス兄等今日ノ欣喜ヲ目睹シテ生等モ亦歡喜ニ堪ヘス。聊カ燕詞ヲ呈シテ祝辭トス。

昭和八年三月十五日

在校生總代

鈴木一郎

答 辭

本日朝野貴賓ノ貴臨ヲ辱ウシ茲ニ本校第二十回卒業證書授與式ヲ舉行セラレ文部大臣閣下ヲ初メ來賓各位ノ祝辭ト校長閣下ノ訓示ト賜リ更ニ先輩並ニ在校生諸君ノ激勵ノ辭ニ接ス生等ノ光榮感激何モノカ之ニ如カン。

回顧スレハ生等淺學非才ノ身ヲ以テ本校ニ入學シ爾來校長閣下並ニ諸先生ノ懇篤熱誠ナル教訓ニ培ハレ實剛健ナル校風ニ哺マレ三星霜雪移リテ此ノ盛典ニ遇フ、師恩ノ鴻大ナルヲ思ヒ感謝ノ念轉切ナルヲ覺ユ。今ヤ我國ハ對支ノ紛争ヨリ聯盟ノ脫退トナリ國際關係ハ正ニ大雨至ラントシテ風樓ニ滿ツルノ慨アリ。加ノミナラス世界の不況ハ未タ其ノ曙光ヲ見ス、我財政經濟ノ前途マタ容

易ニ樂觀ヲ許ササルナリ。殊ニ我國産業ノ大宗ニシテ國運ノ消長ヲ支配スル我蠶絲業ニ至ツテハ内外ノ消費ハ減退シ人絹ノ壓迫ハ加ハリ關稅ノ増壁ハ益々高メラレ其ノ將來實ニ憂慮ニ堪エサルモノアリ。此ノ國家ノ非常時ニ際シ蠶絲業ノ危機ニ當リ生等本校ヲ出テ實社會ニ入り將ニ斯界ノ疾風怒濤ト奮闘セントス、洵ニ血湧キ肉躍ルノ感無クンハアラサルナリ。想フニ退嬰ハ衰亡ヲ招キ進取ハ繁榮ヲ齎ス。身荷モ蠶絲業ニ志ス者誰カ茫然自失從ニ手ヲ拱キテ斯業ノ衰頹ヲ坐視スルニ忍ビシヤ。況ンヤ若キ血ニ燃ユル者ニ於テオヤ。疾風何モノソヤ。諺ニ曰ク「意志ノ有ル所道アリ」。

第二十回卒業業者

(五十音順)

上田蠶絲專門學校  
第廿回卒業生總代

川村五郎

- ◎養蠶科 (三三)
- |       |     |       |     |
|-------|-----|-------|-----|
| 赤池勝男  | 長野  | 新井貞雄  | 長野  |
| 有我彰夫  | 岐阜  | 市川信一  | 長野  |
| 村山長義  | 鹿兒島 | 北澤延榮  | 長野  |
| 清藤三郎  | 鹿兒島 | 倉元隆太  | 岡山  |
| 小林修   | 長野  | 駒井慶治  | 群馬  |
| 齊藤章   | 佐賀  | 清水洸   | 東京  |
| 杉浦卓三  | 愛知  | 田口恒夫  | 徳島  |
| 竹之内可止 | 鹿兒島 | 都築清治  | 愛知  |
| 角田收   | 福岡  | 寺島一太郎 | 長野  |
| 遠山正人  | 長野  | 都賀華   | 京畿道 |
| 中島眞   | 長野  | 仁尾幾朗  | 徳島  |
| 濱井成一  | 大阪  | 福地進   | 福岡  |
| 町田史郎  | 長野  | 宮入保   | 長野  |
| 宮川千三郎 | 山梨  | 森川博   | 熊本  |
| 矢野宗彦  | 大分  | 山崎勝巳  | 長野  |
| 吉田太郎  | 長野  | 頼富正廣  | 香川  |
| 渡邊正男  | 東京  |       |     |
- ◎製絲科 (三四)
- |      |    |      |    |
|------|----|------|----|
| 石井清六 | 長野 | 井田英夫 | 三重 |
| 佐藤猛  | 大分 | 萩原行雄 | 群馬 |

- ◎絹絲紡績科 (一五)
- |       |    |      |    |
|-------|----|------|----|
| 大川猪之助 | 静岡 | 大森一男 | 岡山 |
| 北澤琢郎  | 長野 | 近藤義信 | 愛知 |
| 篠田正信  | 長野 | 鈴木力  | 岡山 |
| 立木一千  | 長野 | 手塚勇  | 長野 |
| 寺井子藏  | 新潟 | 野間直之 | 三重 |

長谷川任三 兵庫 星田 驛 廣島  
松澤 榮 長野 宮下和三郎 長野  
向井 孫市 愛媛

◎選科修業者

○養蠶科 (二)

香山 登 岡山 原 治夫 群馬

○製絲科 (四)

菅野 喜通 嶋根 長谷川恒三 山形  
水上 精一 長野 大上 吉清 愛媛

◎製絲教員養成科 (一〇)

上平 ひろ 長野 佐藤 かつ 長野  
清水 はるい 長野 須藤 静子 長野  
名取 剛 長野 西澤 やす 長野  
西原 芳 長野 宮島 志壽子 長野  
山崎 せも 山崎 ゆり 長野  
昭和八年三月十五日

上田蠶絲専門學校

茶話 (伯林より日本迄)

佐藤 春太郎

歸り途は實に慌しい旅であつた。  
なぜならば研究が案外手間取つた上  
に歐洲大陸の巡歴研究所視察等で伯  
林出發が一日と延び、七月三日に  
日本着の筈であるのに漸く五月十三  
日伯林を出發したのであつたから、  
此約五十日の間に地球の半分を旅し  
オランダ、ベルギー、佛、英、米の  
名ある場所を見落すまじく、猶其上  
に著名の研究所をも訪ねたい、斯道  
の學者にも會ひたいと云ふのだから  
なか／＼慾の深い話である。

滞歐期間の大部分を過し、幾多の  
收得を與へてくれた伯林の地、及其  
美しい郊外を後にして、走る事凡十  
時間余でオランダのアムステルダム  
に着いたが、言葉も獨英自由に通じ  
人柄も獨逸とあまり變りがないので  
大して旅に出た様な氣もしなかつた  
が、只市内縦横に運河が通つて、道  
路の代りにもなつて居るので、北歐  
のベニスとも云はれ、我々もゴンド  
ラならぬ遊覧船で、市内見物をした  
事は、一寸面白い事であつた。歐洲  
屈指の大ドックや、ダイヤモンド工  
場等も、見てはつまらないが、やつ  
ぱり此地での見物の箇所らしい。そ  
れよりか程遠からぬハーレムダムの

見渡す限りの花畑。右側には大輪の  
チューリップが足元から空まで續き、  
左側にはヒヤシンスが地平線にまで  
擴がつて、文字通り一茫萬里の花の  
上に、例の風車がゆるやかに動いて  
居る風情は、旅行中の最美しい印象  
として忘れ得ぬものであつた。ベル  
ギーのブラッセルも整頓された美し  
い市であつた。此處から急行數時間  
で巴里に着いた。佛國は余にはこれ  
で二度目の訪問であるが、成程いつ  
來ても美しい。シャンゼリゼーの大  
通り、マロニエの並木、歴史を語る  
コンコルドの廣場、莊麗な凱旋門、  
其真下常夜燈ゆらぐ無名戰士の墓、  
セーヌ河畔の古本屋の風情まで、さ  
すが詩の都と思はれ、日頃文學には  
縁遠い余まで、歌の一つもひねつて  
見たい氣持になつた。ノートルダム  
では塔の上まで登つて、例の怪物と  
一緒にカメラにもおさまつた。アイ  
フル塔の高きをも知つた。寺院の  
窓からも見えるであらう程近い處に  
革命時代の酷刑場が色々のむごたら  
しい記事と共に保存され、例のギロ  
ッチンを始めあらゆる殘殺具が、其  
儘志士の恨みを千古に残して居るの  
は、見るからに肌粟立つを覺えた

最近では、世界戦争でドイツの三十  
里施の爲めに半ば崩壊された教會も  
見た。ルーブル博物館のすばらしさ  
は短い時、短い筆の到底及ぶ處でな  
いが、茲では只例のミレトやタピン  
チの傑作を幸に見落さなかつた事だ  
けを御答へして置く。ロダンの作品  
だけを集めたムーゼロダンをも見、  
又折柄開催中のパリー博覽會や、春  
のサロンに間に合つたのも幸ひであ  
つた。郊外では天然の美と人工の美  
とを最巧みに取り交せて、其華麗さ  
を世界王宮の隨一と云はれるベルサイ  
ユ宮殿に遊び兼ねて聞いた鏡の間をも  
ねり歩いて見た。猶ソロボン大學や  
パストール研究所訪問等の肩の凝る  
話はいづれ他の機会に譲るとして急  
いでドーバーカレーを渡り直ちに連  
絡の汽車でロンドンにバクトリヤ驛  
に着いた。世界の覇者たる英京、日  
の暮るる事なき大帝國の都、其莊麗  
さを兼て想像して居た余には此れは  
又古ぼけた比較的狭いごみ／＼した  
都であるのがつかりしたのであつ  
たが然し、此處で史實を探ねる時、  
實に掘れども汲れども盡きぬ寶の埋  
藏されてあるのに、誰も感歎するで  
あらう。足一歩ロンドンタワーに入  
つて見るならば、葛葉苔むす澤山の  
塔の中に、幾百年の悲喜劇が今を  
さながらに見られるではないか。案  
内人が二百年前の服装をのまゝ儼然  
と控へて居るのも當時を偲ぶにふさ  
はしい。幾王朝の血の跡涙の影は述  
ぶるを略して一つ氣の晴れる事を記  
すならば此處で世界一のダイヤモン  
ドを見た事である。

よく繪葉書等に見るタワーブリッ  
チも塔の裏口から出てすぐの處にあ  
つた。ブリテッシュミュージアムの素晴  
しき、人類文明の始りから、五千年  
後の今日までを、人は此處に來て始  
めて眼で見る事が出来るであらう。  
歴史に疎い余でさへ、幾度歎服をも  
らしたか知れない。原始島を始め、  
太古動植物の化石を網羅し、完備至  
らざるなき天然博物館や、テードガ  
ラリー、アルバート記念館の内容豊  
富なる、いづれも一瞥を喫した。異  
つた向きではバイドハークの野外演  
説に犬の墓、トラブアルガル廣場の  
ネルソンの像赤いズボンに金モール  
長身華麗な近衛兵が、繪に描いた様  
な姿で、バッキンガム宮殿を守る有  
様は英國ならでは他に見られぬ光景  
であらう。有名な英國國會議事堂も  
ウエストミンスター寺もいづれもテ  
ームス川のほとりに聳えて居る。旅  
の慌しさを暫し忘れて莊麗極りなき  
此大寺院の香のかほり漂ふ中でダー  
ヴンを始め古今學者偉人の墓に詣  
でた半日は、今思出しても尊い記憶  
である。ガルトン實驗堂行きや、こ  
こでビヤソン教授を訪ねた御話しや  
ケンブリッヂ大學でパンネット氏及  
ビクセン氏と親しく語つた記事を  
いづれ又の折に認めるとして、サマ  
ンプトンから乗つたのは五萬三千噸の  
ホワイトスター社の巨船で食堂書齋  
各種運動娯樂の設備に至るまであら  
ゆる最新の設備を施してあるのには  
感心したが、獨逸語自慢のシチュワ  
ドネスのひどいサクセン訛りには恐  
入つてしまつた。毎時計を廿分乃  
至卅分後らすのであるが、うつかり  
忘れて初めの朝早々と食堂に入つて  
居たのも滑稽話の一つである。

船の生活六日目の朝、太西洋上の  
巨船は遂に紐育沖合にさしかゝつた  
海上遙かにそゞり立つ自由の女神、  
其背後雲にも届くエンパイヤの高塔  
を曙の空に眺めた時はさすがにフレ  
ツシュの心地がした。此邊からアメ  
リカの官憲が乗り込んで來てゐるさ  
い檢疫が行はれるのであるが、女尊  
國の御役人には夫人同伴者には御手  
やはらかを通り越してむしろ鄭重な  
のは痛快であつた。ついでにアメリ  
カに於ける婦人の御利やくをも一つ附  
け加へるならば、紐育滞在中、市外  
のカーネギー研究所へ行く時、既に  
徐行し始めた列車が、我々の爲めに  
わざ／＼停車してくれた事である。  
余談はさて置き、昔に聞く紐育の大  
厦高樓には、一瞥と云ふよりは寧ろ  
呆れる外はない。爲めに道路はさな  
がら千仞の谷底よろしくの有様であ  
る。曰く高樓エンパイヤ、曰くプリ  
ツデワシントン、曰くホテル アス  
トリア、曰くデバートワナメーカー  
曰く商會モルガン、其他會社、劇場  
圖書館、病院、等凡人力と財力で築  
き得る世界一のものは、他に一步も  
譲るまいとする米國人の、術をはづ  
れた建築設備には、只驚き呆れるば  
かり。地面一平方呎一萬圓と云ふブ  
ロードウェイの一角に立つて、道行  
く人を見れば、白、黒、黄、嵩、地  
球上のあらゆる人種が入り交つて、  
大車輪の活躍を呈して居る。例の世  
界の相場を左右すると云ふウォール  
街の砂煙りにも二三度巻かれて見た  
(日本正金がそこにあるので)行き交  
ふ婦人の突飛にもきらびやかな服装  
と、商店劇場の奇想天外な廣告灯と  
は、おそろく世界のどこにも見られ  
ぬ光景であらうし、一方此豪華と對  
照に、公園と云はず、道端と云はず  
至る處のベンチに、みずばらしいル  
ンペンが日中長々と腰を据る有様も  
他ではあまり見られぬ圖であらう。

(以下次號)

芽ぐむ春

確氷茂

スツカリ春だ。家のそばの畑の麥が、な、な、と伸びて来た。樹々の芽がふくらんで来た。橋の上へ垂れ下つてゐる木の枝をつかまへて見たらもう青く芽を持つてゐた。で、一層春の近よつて来たことを感じた次第だ。

× × ×

今晩は雨だ。春の雨だ。假りの住居のトタン屋根へ雨が落ちてブツブツ音のしてゐるのが聞えて来る。疲れた体を休ませるために炬燵へ這入つてうつつらうつつらしてゐると、雨足の音で時々心地よい眠い気分をこはされる。

世に認識不足と云ふものがある。「萍蓬生どん」の認識の如きがその典型的なものだ。僕の對現代社會觀を單なる對社會的悲感觀と誤認否曲し「確氷どん」見た様に減入つて悲感許りはしてをられんです。インフレ景氣で物價が騰つたら我々の安月給も高騰に次ぐに高騰しませう。鹿兒嶋は直ぐに飢へてくたばる様な人間はごはさん。(千曲時報昭和八年三月號)と来るに至つては手がつけられぬ。たとひ萍蓬生どんのその發表の形式が揶揄的なものであらうとも、そこには明かに極端なる對現代社會觀の幼稚性を露呈してゐる、勿論僕が今迄千曲時報誌上への發表に對して、僕の對社會觀を「萍蓬生どん」と同様な理解程度に止めておかれた人々は「萍蓬生どん」の存在より類推すれば、他にもあらうかも知れない。然し若しさうであつたとすれば

誠になげかはしい次第である。街ももう少し對社會觀への訓練を経てをられたならば、かかる「萍蓬生どん」の如き、對確氷觀の素晴らしい發見をされずに済んだことであらう。

× × ×

今日は氣の抜けたやうな議會の終つた日だ。新聞の書き立てぬせいかそれとも本當に氣がぬけてゐるのかそれははつきりせぬが、議會開會中「議會らしい」氣分がつい一度も起つて来なかつた。それも僕一人だらうかと思つて周圍に訊いて見たら、周圍もやつぱりさうだといふ。やつぱりさうかな」と漸く安心したやうなわけさ。

× × ×

上野に婦人子供博覽會がある。停車場や電車の中や、その他の目につき易いやうなところに廣告がしてあるが、いつ、こう、行つて見たい、といふ氣が起らない。人から聞かれて初めてそれと感づく位な程度だ。それで時々考へる。

「俺もこんな不感症になつたのかなア」と。

それで友達にそのことを話すと、友達も同じだといふ。

「困るな。こんな不感症になつちや」と云ふと周圍が答へる。

「馬鹿らしくて行かれるかい。博覽會といふ奴は商店の廣告だよ。あんなものに木戸銭が拂へるかい」と。

「さうかも知れぬな、それぢやあれもインテキの仲間かな」

「まあインテキだな」

× × ×

原蠶種の國家管理と云ふ法律が衆議院を通過して貴族院で握りつぶしに逢つた。お殿様が柔かい手で握り

潰してつたのだ。おかげで浮べれると思つたこの方面のインテリが浮べられぬことになつてつた。尤もあの話のたやすく通るものなどとは考へてゐたものは少なかつたやうだが。

× × ×

蠶絲業の將來、といふやうなことがよく問題になる。最近の傾向では殆んど悲感に一致してゐるやうだ。ただ問題なのは、そのテンポだけが早く来るかゆつくり来るかそれだけが残された問題のやうだ。多くの説は、さう早くは来るまい、といふことと一致してゐるやうだ。

だが案外早く来るかも知れぬ、といふ論者もある。

× × ×

蠶は俺の代だけだ。倅には蠶なんかさせない、といつてゐる「よく考へ抜いたもの」もある。何だか社會的變革の途上にある。り、こゝな社會思想家のやうなことをいつてゐる。先づり、こゝな者といつて然るべしだらう。

× × ×

ドイツではヒットラーが歸つてゐる。何だか綱渡りをする輕業師のやうな氣がする。渡りそこねておつちると大變だ。(一九三三・三・二〇)

惡罵

惡口屋

失業救済——それもよからう併し良い田畑をつぶし全然必要もない様な田舎道を作ることとは考へものだ夏など通るも氣味悪い程草ぼう／＼となつて居る失業救済も此處まで來るとよい様な惡い様なものだ。

養蠶實行組合！ 此などもまるで補助金目當てのものが多様な組合を作りさへすれば補助金が貰へると云ふ譯だからうまい話だひどい組合になると只〇〇養蠶實行組合苗圃と云ふ様な棒枕を打込んでおけ併し調査して見ると共同のものでないことは勿論だ此んな組合に對しても補助金を出すことはよいやうな悪いやうなものだ。

◆ ◆ ◆

不景氣！不景氣！此れぢややりきれないと長嘆息をして居る不景氣！

上田蠶絲專門學校昭和八年度入學許可者氏名

○印ハ無試験決定

養蠶科		絹絲紡績科	
長野 相澤行正	五十番順	靜岡 江端爲夫	靜岡 江端輝次
長野 一ノ瀬政元	京都 阿部俊雄	靜岡 榎本武男	長野 上乗之有
長野 井口澄男	京都 田野正雄	靜岡 河原崎忠雄	長野 藤山英信
長野 植村滿義	三重 上村虎太郎	山梨 橋田文平	長野 桑木正和
富山 奥村忠治	熊本 小笠原到	山梨 山梨文平	長野 齊藤利一
長野 北原至	兵庫 川中貞次	佐賀 末次房一	長野 鈴木武夫
岡山 香山護	島根 木村孝義	福岡 高田龍夫	福岡 中村太男
栃木 小林國男	岡山 小西一	愛媛 難波江仲章	愛媛 星野三郎
神奈川 鈴木中	岡山 近藤二郎	福岡 野口春俊	長野 宮坂三郎
長野 關博夫	長野 竹内好武	福岡 堀米俊博	長野 宮原英俊
長野 竹花莊司	廣島 高橋恒	長野 宮島四郎	東京 山本辰雄
長野 高橋守雄	長野 田澤輝雄	長野 山口修紀男	長野 渡邊綱男
京都 傳賢勇雄	長野 中島俊秋	長野 和田幸一	
佐賀 中村壽一郎	埼玉 奈良傳吉		
東京 西川晋	埼玉 西澤政人		
愛媛 羽藤泉	三重 菱田政二		
長崎 増本巖	東京 丸山儀太郎		
長野 宮城時久	東京 丸山儀太郎		
長野 母袋信介	鹿兒島 宮之原正男		
山形 吉田久藏	長野 横山良毅		
長野 渡邊善三	新潟 吉田信伍		
製絲科		絹絲紡績科	
大阪 青木善次	長野 秋山實	岐阜 中川正	岐阜 中川正
群馬 淡島勝男	福岡 市村正	長野 堀内信男	愛知 藤松利八
山口 伊藤茂	愛知 稻垣文一郎	長野 村上實集	愛知 水野利昌
三重 岩田久太夫	福岡 江藤務	福岡 山崎金松	



學籍異動に就て

本校卒業生又は修業生にして學籍(改姓、改名)異動に際し手續を取らぬため他から照會のあつた場合、卒業生又は修業生の資格證明の場合等に當つて學校として困却する事が時々あつて甚だ遺憾と存じます。就ては學籍の異動即ち改姓や改名のあつた場合には戸籍抄本を添へ本校教務課宛速に御届出下さる。

上田蠶絲專門學校教務課

千曲會日誌

三月三日 三陸地方に勃發せし三日早曉の地震並に海嘯の災禍を新聞紙外に於て承知したるを以て被害甚なりし地方へ直に電報にて見舞安否を照會せり幸にも一同無事なる旨返電ありたり

三月五日 被害地方に在職する全會員の安否尙氣遣はれたるを以て更に書面にて北海道、青森、岩手、宮城、福島縣下に在る會員(福島縣は支會長のみ)諸氏に對し見舞ながら異狀の有無を照會せり別欄掲載の如く各會員より一同無事に付安心を乞ふ旨返信ありたり

三月九日 母校道場に於て午後二時より新入會員の歡迎會を開催す會澤理事開會を宣し續いて會務全般に亘り理事會計事務に就て諸生理事及須田氏より學術並に編輯部の事務に就いて何れも説明に併せて將來の希望を述べられたり尙在田會員飯嶋、猪坂の兩氏より祝辭を述べられ新入會代表者の謝辭ありて午後五時理事閉會を宣し無事歡迎會を終了せり

三月十一日 本會々員中村幸吉氏(舊姓玉置(絲十三))三月二日遠逝せられたる旨片倉製絲紀南製絲所在勸の田口榮治氏より通知ありたるを以て遺族に對し謹みて吊辭を呈し尙近畿支會長に其の旨通牒せり

三月十六日 本年度母校入學試験施行の爲め東京、名古屋、岡山、福岡の各地へ試験官一行出張せらるゝに付關係地支會長及附近在勸の會員へ便宜取計方依頼狀發送せり

三月二十日 蠶に有志各位より送附されし故大島秀氏に對する吊慰金四拾五圓也遺族へ送金せり

三月二十日 校友會雜誌第二十五號一部宛各支會長へ發送せり

三陸地方在住會員よりの挨拶

今回の震災海嘯に遭遇せる三陸地方左記會員より何れも本會の厚意を謝す旨に併せて何等異狀もなく一同無事なりし旨挨拶ありたり

北海道寺島親雄 長瀬深見 栗栖忠士 青森縣菅原勇治 小林庸 中村忠四郎 鈴木勇七 岩手縣小林啓介 菊地精一 荻原幸胤 足石泰男 若井弘 近藤正巳 宮城縣本間直人 黒江文雄 細川護 高橋義三郎 井田滿藏 原清志 鈴木貞治 丸山十吉 遠藤正壽 瀧口昇 安喰定治 百瀬哲一 西孝重 山本馨 櫻井汎

福島縣支會長田附仰一郎 會員中最も危險地帯に在りし安喰定治氏が挨拶狀中の一節 前略小生は十三濱村と云う區域内の海邊部落に出張中彼の災禍に遭遇致しました幸に生命だけは助かりました土地の若き者は漸くにしてどうやら逃げましたが悲慘にも老人や子供は夜中突然の事に遭ひ逃場を失ひ多數の死者を出しました。小生も今五六分遅れて避難したならば既に彼の世へ行つてしまつた様に考へられます。小生が逃げ出した時は最早海嘯が膝の下迄來て走るのに非常に困難を感じました故に一本の大木を登見しましたのを幸に登攀し様と思ひましたが之れも何んとなく危険の様に思はれましたので急いで約二丁許離れた丘に無中で避難し事なきを得ました。當時の事を考へますと何が何んだか現在では殆んど想像が付きません後略。

規則第九條第二項の適用に就いて

千曲會集金係

本會々則改正の結果昭和七年度を以て第三回迄の(養蠶科、製絲科)卒業生は規則第九條第二項に該當する事となり左記二項の何れかを希望に依り適用される事となりました。

左記

一、此際一時金貳拾圓を納入されば爾後會費の納入を要せざる事。(第九條第二項)  
二、右一時金貳拾圓也納入無き節は年々爾後八年間會費金四圓宛納入せらるゝ事。(第九條第三項)

但し右二項は之迄の會費完納の者のみに適用するものであるから未納會費のある者は此際至急未納會費を納入の上前二項の適用を受けるわけであり、若し未納會費及一時金等一度に多額の納入に差支へる場合には先以つて未納會費を出来る丈早く納入願ふ方法として年々二回(五月及十一月)凡そ五圓宛本會より請求する事にし、上記第三回迄の會員に對して右の次第を三月末に通知して置き、因に終身會費納入者並に之迄の會費完納者即前二項の規定を直に適用される者は左の如くであります。

終身會費納入者名  
豐部正巳 依田信一 箕輪貞三 小澄 晉 林貞三 加美好男 長野充博  
會費完納者名  
一回 牧野金次郎 松村秀美 松野正 一 丸山俊一郎 工藤一二三 大町省 三 野澤泰治 酒井末吉 森干城 蒲生俊興  
蠶二回 飯島正胤 林新一 磯坂小牧

吊慰金募集廣告

本會々員中村幸吉氏(舊姓玉置(絲十三))豫而御病氣の處養生不相叶三月二日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也  
追而有志吊慰金は来る五月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京第四三三四一番へ中村氏吊慰金の旨御明記の上御拂込被下度候  
昭和八年四月十五日  
上田蠶絲專門學校  
千曲會

住所移動

朝長勝治 蠶二 龜山蠶種株式會社 (三重縣龜山町鹿島)  
小林國造 蠶二 靜岡縣駿東郡小泉村 佐野二八七

細川三郎 絲二 上田市諏訪形  
長見公祐 絲四 横濱市本牧町肥郷三 四四五番地(町)  
菅井辰三郎 絲四 横濱市中區通四丁目 吉開亮一 絲七 旭シルク株式會社 (神戸市海岸道大坂商船ビル)  
山岸寅雄 絲十 昭榮製絲株式會社二 日市工場(福岡縣二日市町)  
關口幸四郎 選絲十七 東京市本郷區駒込町二二〇  
鈴木玄九 絲十八 鐵淵紡績株式會社 製絲工場(松本市外島内村)  
越 英信 絲十八 福岡縣戸畑市明治 鐵業社宅堀内方  
宮原秀人 絲十九 片倉製絲紡績株式會社鳥羽製絲所(佐賀縣鳥羽町)  
西山 省 絲十九 愛媛製絲株式會社 (愛媛縣越智郡富田村)(町)  
巢山喜吉 紡二 新興毛織株式會社 (兵庫縣西宮市外今津町)  
松崎武雄 帝國人造絲株式會社 社岩國工場(山口縣岩國町)  
中森謹二 紡十一 砲兵第二十二聯隊 第四中隊幹部候補生(京都市伏見)  
橋本きぬ子 日東製絲株式會社(岐阜市辨天町)  
石川博見 舊職 大滿洲國新京城内長 奉縣公署  
小澤 丘一同 東京市中野區宮園通 五〇三九  
後藤健雄一同 東京市世田ヶ谷區上馬町二丁目一三九一

編輯室から

本月號は原稿不足でありましたために六頁に致しました。恰度年度變りで何れも御多忙であらせられた爲めに原稿も頂けなかつた事と存じます。而し來月號からは盛に御投稿をお願い致します。佐藤泰太郎先生からは御多忙中にも拘らず有益なる原稿を頂きました事を深く感謝いたします。  
千曲時報も本月號から新入會員九十八名を増加したので發行部數を百部増加して千五百五十部と改めました。